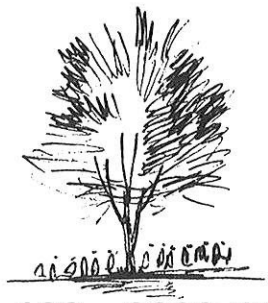
ひかりのこ

光の子



No.133　2008.12.25

●今年の聖句　一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。（ヨハネ福音書12章24節）

クリスマスおめでとうございます。
これまでのお支えに心から感謝申し上げます。
社会福祉法人　光の子どもの家

「ポインセチア」　挿絵・中島英子

「子をしまふ」

セーターに身籠もる真似や子をしまふ
呼べば手を上げて応ふる冬帽子
飴玉のとび出して泣く胼の頬
湯婆に足とどかせて年子なり
泣くときは父呼ぶ子ども冬の草
だだこねる子を置いてゆく冬田道
セーターを脱ぐやアンダーシャツも脱ぐ

鎌田　洋子
（句集「絵筆」より）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp　〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／プリンテング瑛和

待ち望む

聖学院大学大学チャプレン　阿　部　洋　治

クリスマスはアドヴェントから始まります。「アドヴェント」とはラテン語で「到来」を意味する言葉です。昔の教会は、クリスマス前の四回の日曜日をキリストの到来（アドヴェント）を覚える時とし大切に守りました。実際は、祈りと断食の時であり、信仰について学びを深め、イエス・キリストが来られた意味を深く覚える季節であったのです。

アドヴェント、それは、同時に、キリストの到来を待つ時でもあります。私たちは、しばしば、神の存在が分からなくなるような暗い現実に直面するものです。この一年のことを振り返っても、多くの方々が耐え難い不条理に直面させられました。ラジオのニュースで、娘を殺害された一人の母親のことが報じられておりました。「何の罪もない娘を殺した犯人が今日もぬくぬくと生きているのかと思うと悔しさが胸に込み上げて来る。」偽らざる母親の気持ちです。北朝鮮に拉致された息子の帰国を待ちつつ九十数才で先立つことになった母親の姿もテレビで報じられておりました。このように、私たちの現実は、

「神が本当におられるのなら神としての栄光を現して下さい」と祈らないではいられない現実であります。アドヴェントは、自分を含めたこうした世界の暗さを覚える時でもあります。そして、「主よ、来たりませ（マラナ・タ）」（第一コリント16・23）と祈るのです。クリスマスはこのような祈りの時でなければなりません。

私にはクリスマスになると思い出す出来事があります。大阪でのことです。住居兼伝道所であった古い民家の植木にクリスマスのイルミネーションを灯したのです。ところが、ある朝、ずたずたに切り刻まれていたのです。おそらく、人々がクリスマスの雰囲気に浸っていることを赦せないという思いに浸っている人の仕業だったと思います。クリスマスは、こういう暗さの中にある人々の心に耳を傾け、この人々のために真剣に祈る時でなければなりません。ところが、「クリスマス」という名の下に行われる集まりの多くは、暗い闇はないかのような顔をつくらないとそこにはいらないのではないでしょうか。クリスマスは暗い闇に光が灯された出来事を覚える時です。だから、暗い闇の中で深い嘆きをもって神を待ち望むのです。

聖書にも、「主よ、あなたは永遠に昔から、わが神、わが聖なる方ではありませんか」（ハバクク1・12）と神に向かって叫んでいる箇所があります。待ち望むということは、自分と人々の暗い現実の中で神に向かって目を上げることなのです。

イエス・キリストのご降誕、ここには御子を孕んだ母マリアの深い憂いと不安があります。夫ヨセフと関わりのない幼な子を孕んだという憂いと不安であります。ここには夫ヨセフとの関係の危機があり、また不倫によって妊娠したと見る社会の断罪の恐怖もあります。しかし、大事なことは、そうした憂いと不安の現実において、神が介入して下さったということであります。神は、私たちに寄り添って下さる。これまでは無縁に思われた神が私の神として共にいて下さる。アドヴェントは、このような神を待ち望む時であり、このような神のご臨在を探し求める時なのです。

いま妻に助けられる

JICAシニア海外ボランティア　仙道　富士郎

早いもので、パラグアイに来てすでに一年近くが過ぎた。そして、この間、十月には一カ月健康診断のために日本に帰国し、帰路は妻を伴ってパラグアイへやってきた。これから妻と共同のパラグアイ滞在第二ラウンドの始まりである。

この国への訪問は今回で十四回目になるのだが、短期旅行者には夢の国のように見えていたが、やはり長期間滞在すると、短期旅行者には見えなかったものも見えてくる。

もっとも驚かされたことの一つは、警察の腐敗ぶりである。タクシーに財布を置き忘れて、身分証明書を紛失してしまい、再交付を受けるために、事故証明書の申請に警察を訪れたときのことである。決められた日に行ったのだが、「そんなものは上がってきていない」と言う。困ってしまって、知り合いの日系二世の友達に頼んだところ、書類は二時間で私の手元に届いた。彼は笑いながら「警察もすこしお金が欲しかったのでしょ」と言う。同じような話は他でもかなり聞いた。一回閣僚を経験すると、大邸宅が建つという。笑話があって、「政治の腐敗度が世界一のランクであったのを、賄賂をやって二位にしてもらった」という。パラグアイ人のスペイン語の先生は「この国のポリティカ（政治）とポリシア（警察）は駄目だ」と言う。でも彼女は「それでも、私はこの国の人たちが好きだ」とも言った。

こんな経験をしても、私もやはりパラグアイ人が好きである。一八六〇年台、我が国の明治維新のころ、パラグアイはブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ三国を相手に戦った三国同盟戦争に敗れて、大きく国土を失い、また成人男子の半分以上が戦死した。この負け戦の責任者であり、ある意味では国を滅ぼしたロペス将軍を、この国の第一の英雄とし、主都アスンシオンのメインストリートには、Avenida Mariscal Lopezと彼の名前が付されている。彼はこの戦争で戦死したのだが、その誠実さと勇敢さのゆえに国の英雄とする、そんな情緒的なものの感じ方が、日本人に通じるからかもしれない。パラグアイとの関係を持ったことのある日本人には実にパラグアイファンが多いのである。

お世話になっているアスンシオン大学保健科学研究所は、基礎医学研究所と病院の臨床検査部の機能を併せ持っており、研究者の九十パーセント以上が女性である。皆なかなか勇ましい。議論を始めると、機関銃のように言葉が飛び出し、いつまでも続く。スペイン語が良く出来ないから、ほとんど理解できないのだが、話の中に数字がポンポンと入ってくるあたりは見上げたものである。議論に卓越しているだけではなく、ここの研究者たちは全体として実に優秀な人たちである。私とこの研究所との付き合いは二十年以上に渡っており、JICAのプロジェクトの調査団の一員として訪れたのが最初である。今回訪れて驚かされたのは、二十年以上まえにJICAから供与された機器の多くがまだ稼働していることである。JICAの他のプロジェクトでは、高額な機器が導入されたのに、管理維持ができなくて使用されていない場合もあると聞くなか、この研究所の物持の良さは見上げたものであり、しっかりとした研究を展開してきた証と言えよう。

私はといえば、こんな優秀な女性研究者の間でもみくちゃにされると思いきや、結構大事にしてもらい、自分で言うのもなんだが、研究全体の方向性について指導するという仕事は予想以上に順調に進んでいる。すべては、私の仕事の主なパートナーである、この研究所のなかでも飛び切り優秀な日系二世の病理学者のお陰であり、感謝している。

最近、どうしても分からないことにでくわし、少し困惑している。首都アスンシオンの出産の四十パーセント以上が、帝王切開であるというのである。私たちの常識としては、帝王切開は正常分娩が困難な場合だけに行われるものと思っていたのだが――。心優しき人々の国パラグアイにもなにかおかしなことが起きはじめているのだろうか。

エッセイ

ちぐはぐな

彫刻家　中島　睦雄

秋の展覧会が終わった。十一月の中ごろの一週間が毎年私の所属する彫刻団体の秋の展覧会である。会の主たる展覧会は、春の五月に上野公園の東京都美術館でのものだが、こちらはもう五十七回展が済んで、秋の展覧会は三十一回目だった。

この第三十一回展では、いろいろな、小さなちぐはぐな事件があった。

展覧会の会期は十一月十一日から十七日まで、十七日は少し早めに打ち切り、会場の片づけと作品搬出である。この作品搬出がなかなか大ごとである。秋の展覧会は小品だけに限られているが、石の作品や石の台などがあると、簡単ではない。今年の私の作品は四十センチ程の首で、しかも材料が石膏だったから余り骨の折れるものではなかった。

ところが、肝腎な搬出の日に、急用ができてしまって会場へ行けないことになってしまった。仕方なしに、事務所の久保田氏に頼むことにした。

「久保田さん、搬出の日にどうしても会場へ行けなくなってしまったんですよ。悪いけど私の作品を宅配便で送ってくださいよ。そう、代金は着拂いで。作品は石膏だから軽いけど運送中に鼻ぐらい欠けたってかまわないから。」と言って頼んだ。

事務所は大変である。こんな依頼をするのは私だけではないから。北海道から、九州からの作品があれば、搬入搬出をしてやらなければならない。

私の作品は翌日届いた。しかも、もち論、欠けたりはしていない。

作品はきちんと届いたのだが、久保田氏は次の日に私の留守に、家にお菓子の入った袋を届けてくれた。夜、久保田氏に凪でのお礼を言うと「会場の片づけが終わった時、最後にあのお菓子の袋が残っていたんですよ。袋の中にあったメモで、中島さんあてだとわかったんです。」と言う。

展覧会の出品目録の私の名前に○がついていて、矢印があり「大田区カマタ、アサノ様より」とメモ書きがあった。

おやおや、浅野さん、ご高令なのにわざわざ会場へ来てくれたんだ、と思った。歩くことも多少不自由なのに、申し訳ないとも。

お菓子は虎屋のものであった。虎屋だったらようかんか、と思ったが、箱が少し軽い。ようかんでなかったら何だろうと思い、私は家内と二人で袋の中の箱をあけてみた。軽いお菓子であった。私たちは「こういうお菓子もうまいね。」と、浅野さんに感謝しながら食べた。そして私は、浅野さんにお礼の電話である。「どうもありがとうございました。わざわざお出かけ下さいまして、お菓子までいただいて、恐縮しております。ところで、浅野さん、展覧会の事を何でお知りになったんですか？」と聞くと「案内状をいただきましたで。でも私は会場へは行かなかったんですよ。会場当番の方に《中島さんに展覧会おめでとうございますってお伝え下さい》と電話でお願いしておきましたのよ。会期は十九日までですよね。」とおっしゃる。そうなると、あのお菓子は私がいただいたものではないということだ。しかも、食べてしまったのに。

しばらくすると事務所の久保田氏から電話がかかってきた。彼は何も言わずにワッハッハッハと笑っている。「中島さん、関口さんから電話があって、《お菓子の袋が置いてなかったか》と言うんですよ。関口さんの留守に会場当番が受け取っておいてくれたと、関口さんの友達から連絡があったんだって。」ということであった。私の方もワッハッハッハである。「おれ、あの菓子は食べちゃったよ。なんだ、関口さんがもらったのを、知らずに食べちゃったわけだ。ワッハッハッハ。」である。

関口さんには申し訳ないことをしてしまった。

そのうち、当の関口さんから電話が入った。彼女も大笑いである。「あのお菓子は、私から中島さんに差し上げることにしますから、どうぞ召し上がってください。ところで、中味は何が入っていましたか、持ってきてくれたお友だちにお礼を言わなくっちゃあ。」

こんな具合である。今度は、私は関口さんに感謝である。

それにしても浅野さんには案内状を出していないのに。会期は十九日までですよね、とおっしゃったところをみると、どうやら彼女は去年の案内状を見ていたものと思われる。たしかに去年は、十九日までだったから。

どうも、あっちこっち、ちぐはぐだった。

旅立ちの季節に向けて

西貝正仁

若い人達の、旅立ちの季節が近づいています。今このように言っても、ピンと来ない方もいらっしゃると思いますが、四月へ向けての準備が大詰めにさしかかっているといえば、納得いただけるのではないでしょうか。

私が現在養護学校の教員であることは、前回の寄稿文でお話しましたが、養護学校以前には、高校に勤務しておりました。その頃は、毎年の卒業式で新しい進路へ向けて旅立つ生徒達の様子を見ながら、やっと終わった、という自分がいたような気がします。学校を巣立つわけですから、これから先の道のりについて思わなければならないのですが、どちらかというと、私にとって、一つの仕事が終わったことのほうが大きかったのではないでしょうか。

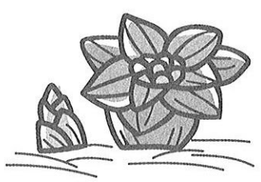
現在の養護学校に勤務するようになって、中学部の生徒と過ごす中での卒業は、同じ学校の中での高等部への進学であり、新しい生活への移行は、新しい環境の中で苦労しながらも生き生きと活動をしている様子が見ることができる新しい楽しみを与えてくれました。我が家の息子が高校三年生になって今この時期を迎えてみると、なんとこの時期は若者にとって大きな変化の時期なのだなぁと、改めて感じさせられます。自分自身もこの時期を通り過ぎていたはずなのに、自分では見えなかったことが沢山あったのだと思います。

新聞記事の中で知ったのですが、「日本人の国民性調査」というものがあります。興味を持ってインターネットで調べてみたのですが、一九五五年に始まり、五年ごとに同じ内容で調査を続けてきているということでした。調査の内容は自分のこと、家族のこと、社会のこと、政治のことなど多岐にわたり、日本人の全体像を解明しようというものです。

この中で「子どもが学校を卒業して就職する時」「娘が嫁入りする時」に、それぞれ親がどのように声をかければいいかという設問に対して「一、困ったことがあったら親に相談しなさい。二、困ったことがあっても親を頼りにしてはいけない。三、その他」の三つの選択肢が設定されている項目に興味を引かれました。この項目は、一九七三年から始まって、それ以前の資料はないのですが、一九七三年当時の回答は、就職の時、相談しなさいが五八％、頼るなが三七％であったものが、二〇〇三年では相談しなさいが七三％、頼るなが二一％に変化、嫁入りの時も、一九七三年では相談しなさいが五四％、頼るなが四二％でしたが、二〇〇三年には相談しなさいが七二％、頼るなが二三％に変化しています。この回答については、これだけでも考えさせるものがありますが、「自分にとって一番大切なもの（選択肢なし、自由回答）」の項目で「家族」と回答した人が、一九七三年で一八％であったのが、二〇〇三年では四五％に増加していることと合わせて考えてみると一つの傾向を見ることができるのではないでしょうか。

もちろん、子どもを大切に思い、親としてできることは最大限にしてやりたいと思うのはすばらしいことであり、社会の最小単位の家族を大切に思うことが必要なことであることは否定できません。しかし私達は子供に対して何を期待するのか、そしてどのように生きていくことを望んでいるのか、という面から見ていくと、この回答からは、子どもが一人前の人間として歩んでいく姿を応援する様子ではなく、いつまでも自分の周りにおいておくことを望んでいる姿が見えるように思われるのです。

新しい旅立ちの季節が近づいています。私達は子どもに十分なことをしてきたでしょうか。旅立ちに必要な力をつけたでしょうか。私達は胸を張って送り出せるような家族、大人ではなかったかもしれません。心配な気持ちから、後ろ髪をひかれるような思いで子ども達を送り出す時が近づいています。



Merry Christmas

サンタさん

ピカピカひかるツリーがあれば、サンタさんはまちがえずにボクのおうちにきてくれます。クリスマスにはサンタさんにチョコレートとバスとクルマをもらいたいです。

三才　広司

温かいクリスマス

冬が寒くって本当によかったと思います。部活が終わって寒い帰り道を帰って家に着くと一番最初に「温かいなぁ」と思います。暖房の温かさもそうですが、どんなに遅く帰ってきても、必ず起きて待っていてくれる、そして、温かいご飯を作ってくれる人がいるからです。僕も他の人にとって、温かい存在になれたらと思います。

クリスマスイブには、みんなで食堂に集まり、ロウソクを灯してメッセージを送り合います。僕は感謝を伝えたいと思っています。メリークリスマス。

高二　龍治

プレゼントは・・・

わたしはクリスマスプレゼントをサンタさんに「チョコ」と「メモちょう」と「ガム」と「シール」と「えんぴつ」と「とけい」と「ふでばこ」と「コップ」と「カレンダー」をおねがいしました。ねがいがかなったらうれしいです。ページェントはてんしをやります。きょねんもてんしだったのでおぼえています。がんばりたいです。

小二　美咲

楽しみなクリスマス

わたしがクリスマスで楽しみなことはページェントです。今年も聖歌隊がやりたいです。特にハンドベルをやりたいです。去年はハンドベルを一つしかできなかったので、今年は二つやりたいです。ページェントの後の夕食会も楽しみです。毎年クリスマス会に友達を呼んで、みんなで夕食を食べるのが楽しみです。夕食が終わったら交換プレゼントも楽しみです。何が当たったか交換プレゼントを見せ合うのがとても楽しいです。

今年もあとすこしでクリスマスなので楽しいクリスマスになるように過ごしたいです。

小六　真理

最後のクリスマス

今年は、私にとってここで過ごす最後のクリスマスです。私は今年もクリスマスをここで過ごせることに感謝しています。

クリスマスと言えば何だろう？って考えると、ケーキや、ツリーやプレゼントなどいろんなことが思い浮かびます。でも実は、この日は、イエス様の誕生日でもあるんです。十二月二十五日は、イエス様の誕生を祝うページェントをやっています。ハンドベルの演奏もあるんですが、その音がすごくきれいなんです。今年もみんなにサンタが来るといいです。最近は食事にもちょこちょことクリスマスの話題が出ています。プレゼント何がほしい？とかページェントは何の役やりたい？という話が出てくると、もうすぐクリスマスなんだなぁと思いながら、この間夏休みだったじゃん、時が経つのは早いなぁと思います。

今年のクリスマスは、みなさんどう過ごしますか？良いクリスマスになることを祈っています。今年のページェントも必ず成功させたいです。

では、よいお年を。

高三　華美

せいかたい

クリスマスおめでとうございます。今年のページェントではせいかたいの役になりました。ぼくはピアノを習っているので楽ふが読めます。ハンドベルもれん習の時に「うまい！」とほめられました。あとは歌です。声が大きくないので、声を大きくして歌いたいです。

プレゼントは何がいいかなぁとかんがえています。まだまよっていますが、そろそろ決めてサンタさんにおねがいしないと間にあわないかもしれません。早く決めたいです。

小四　要

サンタは本当にいるのか

もうすぐクリスマスですね！毎年この時期になると、クリスマスがあり、正月も来るのでとても楽しみです。この光の子どもの家に来る前は、サンタは本当にいるのかなぁと思っていました。今でもそう思っています。しかしプレゼントは毎年クリスマスの朝になると枕元にあります。でもサンタは見たことがありません。プレゼントをくれるのはサンタらしいので、サンタはいるのでしょうか。

今年もそんなことを思いながらも、サンタさんにはプレゼントのお願いをちゃんとするのでした。

中二　一

アドベント

メリークリスマス。わたしたちはクリスマスの四しゅう間前からアドベントと言ってまいしゅう日よう日にれいはいとおいわいをします。きょねんのアドベントではマッチ売りの少女をやり、やさしいおばあさんの役をやりました。今年はなにをやろうかな。

きょねんサンタさんはプレゼントをくれるとき、サンタさんがおこしてくれました。サンタさんは帰るとき電気をけしていかなかったのでまぶしかったです。

こどしもサンタさんがきたらおきておれいを言いたいです。

小四　奈美

クリスマスと言えば

メリークリスマス。ここで迎えるクリスマスもあと二回となってしまいました。みなさんはクリスマスと聞いて何を連想しますか？私はプレゼントを連想します。高校二年にもなって、去年はなんだっけ？とか今年は何がいいかな～とか考えてしまいます。

そんなわたしですが、真面目なことも考えます。自分にとって一番のプレゼントは何かというと、神様からもらった命です。この命を大事にしたいと思います。クリスマスの日、イエス様がお生まれになりました。イエス様は大事な命をわたしたちの罪が赦されるために捧げてくださいました。

わたしたちはクリスマスの意味を考えながら、イエス様がお生まれになったことをみんなでお祝いします。今年のプレゼントは何がいいかなぁ～・・・

高二　育実

ページェント劇

二十五日にはイエス様がどういう時代に、どういう所で生まれたかを劇にしてみんなに見てもらうページェントがあります。わたしはみんなの前で劇をやるのは恥ずかしくて嫌です。でも毎年みんな「良かったよ。」と言ってくれます。

ページェント劇をやったあとにはみんなでいっしょにご飯を食べて、交換プレゼントをします。それは楽しみです。それとクリスマスプレゼントもとても楽しみです。ページェント劇さえがんばれば、あとは楽しいことばっかりです。

小六　早紀

プ・リ・ズ・ム

河のほとりで　倉澤家

毎年クリスマスが近づくと、食卓の話題はページェントの配役、そしてクリスマスプレゼントのことが中心となります。

小二の成黎に、「今年は宿屋のおじさんやってみない?!成黎は歌が上手いし、ぴったりだと思うんだけど、どう?」と言うと、「えっ、やだよ!はずかしいし、オレは羊飼いでいいです。」という返事。しかしその後「どなたじゃ～♪」と口ずさんでいたところを見ると、満更でもなかったのかもしれません。

プレゼントについて、成黎に尋ねると、「う～ん、やっぱDSかな。」と担当者にはゲーム機が欲しいとアピールしていましたが、同じグループのお姉ちゃんたちには、「お父さんがほしい」と言っていたことがわかりました。

彼には、今年度少しずつ真実告知を始めています。両親とは一緒に暮らせない…ということを彼も知っています。毎日生活を共にしている担当者のことは、とりあえず母親として位置づけてもらえているようですが、倉澤家には専属の指導員がいません。父親的存在が不足しているのです。

指導員も様々な努力をして彼に関わってくれてはいますが、彼ひとりのためにという時間は限られてしまい、彼の欲求を充分満たすまでには至っていません。

お金では買うことのできない、このプレゼント。

彼に贈ることができないのが辛い担当者です。

倉澤　智子

子どもたちの季節　仙道家

メリークリスマス。寒さが厳しくなってきましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

私にとって今年のクリスマスは、光の子どもの家で迎える初めてのクリスマスです。今からとても楽しみです。

本当にここまであっという間の日々でした。

私は四月より仙道家の一員となりました。最初は何も分からず、自分自身の生活に慣れるということが精一杯で、子どもたちの方まできちんと目を向けてあげることができなかったと反省の日々です。

四月より家替え、担当者変更があった中でだいぶ落ち着いて生活できるようになってきたのは、私も含め子どもたちだと思います。子どもたちにとって、担当者変更とは、それはそれは大きな事だったと思います。日々の生活の中で痛感させられます。

それでも、子どもたちを思う職員や子どもたちの気持ちを考えると落ち込んでもいられません。

私は、私なりに『「もう一人応援する人、大好きだよという人」が増えたんだよ』というように、彼らの成長を見守り続けていきたいと思います。

岩瀬　志穂

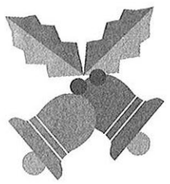
光の中で　佐藤家

クリスマスおめでとうございます。今年も光の子どもの家の園庭には五木田さんが作った大きなイルミネーションが鮮やかな青と白の光を輝かせています。

今年は、佐藤家のダイニングルームに古い教会をモチーフにしたドイツ製の立体模型になったアドベントカレンダーを飾りました。アドベントカレンダーとは十二月一日から主イエスキリストがお生まれになった二十五日までの四週間、日めくりになった扉を開けると中から羊や星など毎日代わる代わるに出てくる絵をお楽しみにするものです。普段は朝寝坊の美貴ですが、目を覚ますとすぐに一番乗りでダイニングルームに降りてアドベントカレンダーの扉を開け「今日の絵はケーキだったよ」などと知らせに来てくれます。

ところが、先日アドベントカレンダーの意味などわかる訳のない新入りで五歳の北斗が十二月二十五日の大きな扉を早々と開けてしまいました。クリスマスの絵を心待ちにしていた美貴をはじめ他の子どもたちは北斗に注意を浴びせるが、何を怒られているのかさっぱりわからず泣き出してしまう始末。北斗には扉の中の赤ちゃんはイエス様なんだよと説明しました。アドベントカレンダーの十二月二十五日の扉は開いてしまいましたが、クリスマスまでのみんなが豊かな心で迎えられるように、祈りを込めて待ち望みたいと思います。

穴水　祐介



原田家日記

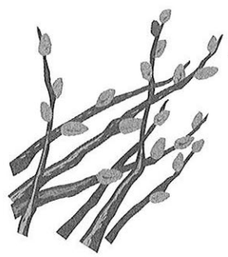
ついこの間新年を迎えたばかりだというのに、もうすぐ一年が終わろうとしています。皆様いかがお過ごしでしょうか。

光の子どもの家では、皆様に囲まれて感謝の集いを終えると、最も賑やかなクリスマスに向かいます。十一月からアドベントが始まる今年は、いつもより長くお祝い気分を味わうことができ、少し得したような気がしています。子どもも大人も楽しみながら忙しくしている、そんな今日この頃です。

さて、イエスさまの誕生を祝う前に、先月原田家では、綾の誕生日会が開かれました。彼女の母もお祝いに駆けつけてくれ、母も十一月生まれということで、綾と相談して二人の誕生日会をすることにしました。その中で綾から母へ「産んでくれてありがとう。」母からは「生まれてきてくれてありがとう」という言葉がありました。

ここに来てから私は、「生まれてきたことを祝う」ことの意味を、今まで以上に考えるようになりました。生まれてきて良かったと思う時間は、そうでない時間より圧倒的に少ないものですが、それでも子供達が「生まれてきて良かった」と感じるような生活を創りたい、「生まれてきてくれてありがとう」と伝えられる私でいたいと、改めて思う一日でした。

鈴木　晶子



季節のおとずれ　竹花家

小学校の持久走大会を明後日に控えた夕食中のこと、六年生の誠一が「ね、あとで練習しに行こうよ!」と言い出しました。どうやら鈴木指導員に「今から筋肉を鍛えるのは難しいけど、肺なら鍛えられるぞ!」と言われたことがきっかけのようです。すると「うちも行きたい!練習しよう!」と四年生の要も言い出しました。一学期の頃の要は「学校やだな～」「勉強したくないな～」「面倒だな～」と授業や行事に対してなかなか前向きになれず、双子の妹美也子と自分を比べては「美也子は何でもできていいな～」ということが目立っていました。やる気になった要に「要、前向きでいいね～!」と褒めると「だって、順位上げたいじゃん!」と言って練習の様子やタイムを話してくれました。

大会は明日。一年生の冬子は初めての持久走大会。正直、八百mを走りきれるか心配です。スポーツ万能の美也子は今年も一位を目指しています。要は緊張しながらも楽しみにしています。誠一にとっては最後の持久走大会になります。

そして私の役割は、子どもたちが最後まで力を出し切れるように応援すること、それとご褒美のケーキを焼くことです。

牧野　由紀子

養護メモ 124

家族に関わる その25

入所 出生 絶対受容Ⅳ

菅原 哲男

これまでのお励ましに感謝し、クリスマスの祝福を祈ります。

これまで、ウイニコットが言う絶対依存期に必須の絶対受容について述べてきた。

家族をもう一度考えてみる。

異性同士が一緒に暮らすことを決意する。そして暮らしをつくり愛し合うことによって新しいいのちを妊る。このいのちは女性が母体と名前を変えた母親の胎内で育つ。程度の差はあるが「つわり」などは男性にはとうてい理解不能な困難である。電車に乗ると車酔いをする。だから相当の距離でも歩く。調理もにおいが襲う。何ともやっかいなことである。そして体全体が著しく変化する。大きなおなかを抱えて日常的な活動はこなす。これは修行に等しい行為だろう。難行苦行にも見える。そうやって母子は一体のままこの期間を共感的に過ごすのである。そして出産。出産は人としての母体の能力を超える出来事である。こんな娘が欲しいとかこんな子はいやだなどと思ってもその通りにはならないことである。だから女性にとってもっとも信仰的な時期なのだ。健康でさえあればよい、安産でありますように、と母親は祈るのである。母の祈りから新しいいのちが誕生するのだ。父親と母親と子どもという家族の基本形が生成されるのである。母子や父子、祖父母と孫などの家族が多くはあるが、ここではあくまでも古典的な基本形としておく。

このように、母と子は一体で過ごすかなり困難な時期を過ごすのである。原初的家族関係の中で最早、母子と父の位相が同一ではないのだ。位相の違いと質量や存在そのものの違いとは同一ではない。それぞれに存在する意味はあることは言うまでもない。

母子は妊娠から出産まで、そして出産からおおよそ一年ぐらいはそのまま一体で、絶対依存と絶対受容の関係そのものであったのである。その関係を保障するものとして父親の存在があったのだ。そして親子を基準にした家族員がひとかたまりになって暮らしを共にし創っていくのである。柑橘類の果実のようにお互いが組み合わさり一つの家族を形成していたのである。それを住居が住まう場所として表皮のように包み込んで社会との接点となり、守ってきたものである。その果実のような家族の暮らしの塊りを家庭と呼称してきたのである。

しかし、文明の進化というものなどが人々の暮らしの仕組みや有り様を変化させてきた。人生の終晩期であり利子のような今を生きている者にとって、暮らしの様式の激変は言語に尽くせない。有り様や仕組みが激変したということは、その内実も激変してきたのである。

一般に子育ては古典的な意味での家族によってなされてきていたのである。その家族の有り様や仕組みが変化しているのに、それまでと同じようなはたらきを家族に課してきていたのであるから実態としての家族と、あるべきだった家族との間に齟齬が出来るのは当然である。具体的な家庭や家族の意味について真摯に考えて対応をしなければならなかったのである。もっと言えば人が生きること、そして出会い愛し子を為し種としての継承をはかるように仕組まれてきた無意識の意志についてまで、その有り様を少しずつ文明の展開速度に追いつく程度に変化を試みなければなかったのである。

これまで欧米、特にアメリカ文化の影響を受けてきた我が国の社会福祉事業は、サポートを必要とする人々のサポートの種類によって分類するやり方を取り入れてきた。

家族の状況が病理現象を呈することによって親子分離をするということはその子どもの生命身体の安全を確保するために必然である。

しかし、前述したように、家族が有機体のひとかたまりであることを前提にするならば、子どもの問題は家族の問題である。家族全体のゆがみや病を対象にしてこれの解決を図らなければならないのは理の当然である。

しかし、分類してそのサポートを合理的に提供するというやり方は、合理的ではあるが人間的な面を失うことにも通じるのである。

子どもの安全を守るために分離しなければならなくなった家族全体を見通して、その問題の解決に迫るのは最も困難な方法であるだろう。

合理的に、最も簡便に人間に関わるという不遜がこのときに頭をもたげるのである。

最も困難な選択肢を選び取る勇気と力と決断を迫るイエスは、「狭い門から入れ」と命じられている。

現場から

続・光の子らしく ㉝

岩崎 まり子

今年は秋が長かったような気がします。ようやく庭のけやきも葉を落とし、凜とした佇まいを見せています。その裸木が冬の星々を冠するその景色は、本当に何度見てもため息が出てしまいます。

皆様、お元気ですか。

先日、一緒に入浴しているとき、理奈がふいに、

「理奈、ママのおうちに行きたい。」

と言い出しました。

「遠いよぉ。」「散らかってるよぉ。」等言いましたが、

「いいよ。」

と、確信に満ちた返事しかしません。

「そうだね、今度ね。」

と軽く言うと、

「絶対ね。理奈が高校卒業したらね。」

――。一瞬、私は胸をつかれました。

折しも、家庭復帰の子どもを見送った後で、また会議では高校三年生の卒業後の居場所について協議を重ねていたところだったのです。こんなに小さい、小学生のうちから自分の居場所について考え、不安にならざるを得ない彼女たちの状況…。

ここへやってくる子どもたちは、どの子も〝よくぞ、生きていてくれた…〟と思うような現実の中で生を受け、生き抜いてきています。だからこそ、今を安心して楽しみ、大丈夫感を持って少しずつ成長していってくれれば…と日々願いながら関わっているのです。勿論、〝成果〟をあげられるようなものはありませんが、大きなテーマとして掲げてきたつもりです。

しかし、理奈のタイムリーな一言は、もっと現実的な、目の前にある大丈夫感のなさを私に突きつけました。そもそも〝十八才まで〟という期限つきの中で、心に重傷を負った子どもたちが真の安心を得られるのでしょうか…。

子どもたちの現実と施設側の現実、そして〝じゃあ、私は何が出来るのか。どこまで投げ出せるのか〟という私の現実がせめぎ合います。

光の子どもの家では、実際に十八才以降の生活を伴走したり、また困ったときに帰ってくる場所としてもらったりと、関わりを拒否したり否定したりはしていません。

けれど、

「ママ、大好き。ママは？」

と何度も尋ねる丘実にしても、卒園を前に、

「私なんか居なければいいと思ってるんでしょ！」

と怒鳴り散らしたあの子たちにしても、心の中は皆同じで〝私がここに、傍にいることをお前は心底望んでいるのか。私は本当に居ていいのか〟という重い問いであり、不安であるように思うのです。そして、その問いに他者が答えを出すことは不可能なのでしょう。本人にしか答えを出せない問いであり、また生きているうちに何度も何度も自分で問い直すのでしょう。

彼らの大きな重たい問いに対し、私は何を応えられるのか。自身の内面と向き合うと謝罪の言葉しかありませんが、私自身が誰より引き受けてもらって許されて今があることを忘れないで関わり続けていくこと――その中でしか見いだせないような気がしています。

皆さんの求め続けているものは何ですか。それは、もう見つかりましたか。

どうぞ、よいクリスマスを…。

Merry Christmas!!

今年も皆様のご支援に心より感謝！
楽しいクリスマスが訪れますように・・・

日誌抄　＝子どもと創る暮らしの風景＝　2008年8月1日▶9月末日

２００８年８月
幼児４名　小学生１８名　中学生６名　高校生７名　措置外５名　計４０名

２日　ハムコ会の方々の御厚意で小学１、２年生が鹿島へ２泊３日の夏の思い出作りに行かせて頂く　様々な面でお支え頂いている長年のご支援にも感謝
７日　今年も池田多嘉子様宅に宿泊させて頂き佐渡ヶ島へ沢山の方々のご支援により色とりどりの思い出ができた　今年は社会事業大学の小松洋美さんがボランティアで同行して下さった　感謝
１０日　竹花様の御厚意により宇佐見へ　毎年宇佐見の花火大会を楽しみにしている子どももおりご支援に心より感謝
１２日　小西様の御厚意により秋田へ　自然豊かな土地で夏を満喫　感謝
１７日　東大宮教会の教会学校中高科夏期学校　今年は群馬県のキャンプワンダーに宿泊　前橋市と高崎市を跨いで２５ｋｍ程のナイトウォークを経験
２２日　聖学院大学学生ワークキャンプで21名来訪宿泊
２９日　写真家福島力さん来訪　今年も子どもと職員のポートレートを撮影して下さる　毎年変わっていく子どもたちの表情がとても良く楽しみだとのこと　感謝　夏休みさよならパーティ　２学期に向けて気持ちを切り替える　豊かな思い出が作れたことを感謝

〈８月の物品ご寄贈者〉
三上美弥子　真田明美　佐藤優　株式会社ダイエー　斉藤康光　ハーベスト　他多数の御各位様

９月
４日　埼玉育児院職員と設計士の方が来訪見学
５日　渡部かずき君記念礼拝　今年ももう高校生になった当時の同級生が10数名集まって下さり献花頂いた　感謝
６日　カリフォルニア州立デイビス大学の学生ライアンさんの送別会　別れを惜しみながら夏を振り返る
９日　やんちゃでかわいい５才の秋山北斗君入所　成長を祈りながらみんなで暖かく迎える
１０日　大利根中学校との連絡会
１２日　山ノ下恭二牧師による夕礼拝　ご奉仕感謝
１９日　鈴木重義先生による職員礼拝　ご奉仕感謝
２５日　大利根町要保護児童協議会実務者会議へ竹花信恵　町内における要保護児童のケースを確認
２６日　東埼玉バプテスト教会木田牧師による夕礼拝　ご奉仕感謝

〈９月の物品ご寄贈者〉
新木裕子　宮原康子　白石春美　大岩文江　藤村順子　他多数の御各位様

豊かな実りの秋も過ぎて、星空の綺麗な冬がやってまいりました。皆様の変わらぬご支援に心より感謝申し上げます（洋）

反射光

高く澄んだ夜空には無数の星がきらめいて子どもたちと寒さの中飽きもせずに星を眺めることもしばしば☆早いもので今年二〇〇八年ももう終わりを迎えます☆一年を振り返ると子どもたち一人一人の顔が浮かびます☆自立にもがき苦しみながら自分の道を模索している子やひたむきに仕事を頑張っている子☆今年度受験を迎える数名の子は勝負の年だと努力を積み重ねてきました☆小学生になった子もいまではランドセルがよく似合い中学生になった子も学生服が小さくなるほど成長しました☆それでは自分は・・・と省みれば子どもたちに比べていかほどの前進ができたのか☆否応なく自省が求められます☆世間では経済不安からの超就職氷河期が訪れ子どもたちの自立にも直接的な打撃として降りかかっております☆先行きの見えない社会情勢ですが今年もクリスマスは心を込めてお祝いします☆皆様に暖かいクリスマスが来ますようにお祈りしつつメリークリスマス☆　（洋）